

## 二〇〇八年 センター漢文 解説速報

## 【全体解説】

大方の予想どおり、昨年より若干難しくなった。分量はかなり増えて、三段落に分かれた論説系の文章である。文章の傾向としては、レギュラーの授業でさんざんやって来たパターンに近く、その意味では高卒生にとつてはかなり有利な問題となった。現役生にとつては、普段読み慣れないジャンルの文章であり、苦戦した受験生もいたことと思う。

論説系の文章であるから、当然読解のポイントは、テーマは何か、段落ごとにどう展開しているか、である。第一段落は隋の画家、第二段落は唐の画家の話で、ここまですが例証部分であることは、容易に見当がつく。さらに第三段落は「楊・韓二子のごときは」と言つて、前のふたつの段落から導き出される結論を述べ、それから「今の学者」の話へと展開する。ここからがこの文章のテーマであることも、すぐにわかったであろう。あとは、授業でもたびたびやったように、論証部分（比喻や例証）に述べられていることから、テーマの内容をつかめばよい。第一・第二段落で述べられていた画家の話は、どちらも絵の手法や画法から学ぶのではなく、人や馬や建物といった描く対象そのものを観察し、今で言うデッサンを積むことが、絵画上達の方法であるということ述べている。そこから、今の学者は經典の訓詁注釈ばかりを研究しているが、それでは真理を追究することなど到底かなわないことを述べている。真理を追究しようとして古の聖人たちが書き著した經典ですら、真理そのものではないのに、その經典の字句の注釈に終始しているようでは、真理からはほど遠いということである。訓詁（注釈）学は中国の学問の王道ではあるが、どうしても重箱の隅を突くような細かな字句の解釈に陥つてしまいがちであり、そこがしばしば「今の学者」の難点として指摘されることは、授業の中でも見てきたとおりである。その意味で、この文章のテーマは決して珍しいものではなく、おおよその方向性は比較的つかみやすかつたのではないかと思う。センター試験の特徴として、テーマが押さえられれば、設問はほぼ芽づる式に解けて、高得点が狙える。やや難しくなつたとはいえ、落ち着いて考えて解けば、満点は決してむずかしくない問題である。

## 【設問解説】

設問のスタイルに関しては、かなり変化が見られた。まず定番となつていた漢字の意味を問う設問がなくなった。代わりに私大でよく見られるような、基本的な漢字の読みを問う設問となった。また、返り点と書き下しを問う設問もなくなり、問2の書き下しを問う設問となった。ただ、これは訓点を省いた白文を読ませるもので、実質的には訓点をつけさせる設問と変わりはない。さらに問6の内容合致の設問も、文章の構成を問う設問へと少し形を変えてきた。このスタイルは数年前にも一度出題されたことがある。全体としては、これまで以上に知識ではなく内容読解を問う傾向が強まつたと言えるだろう。

問1 どちらも頻出の基本的なよみの問題。(ア)は上下に人名があつて、下に「俱に」とあるので当然「く」との形である。(イ)は見た瞬間に「もとより」が浮かんだはず。入れてみて、おかしくなければ、それで確定。

問2 どちらも基本句形の問題。

Aは、当然「比較」の「不如(く)にしかず」の句形に気がつけば、すぐに②と④に絞れる。「法士」が主語で、動詞は「知」だから、「法士は楊におよばないことを知つた」という意味だとわかれば②が正解だとわかる。

Bは、当然「使役」の「令」がポイント。選択肢から、「明皇詔して」と「画法を受けしめんとす」が確定。「陳閔」の上に「従」があるので、「陳閔をして」と目的語にならないことに気がつけば、正解は③とわかる。

問3 内容読解の問題。第一段落は、法士が楊に「画本を求め」たが「告げず」、人馬や衣冠を見せて「これが私の画本だ」と言つたとある。そこから(1)は絵のお手本だが、(2)は描く対象そのものであるとわかる。一方、第二段落でそれに相当するものは何かと考えれば、「画法」が(1)のお手本にあたり、実際の馬たちが(2)にあたるが、馬たちを「皆、臣の師なり」と言っているのが、⑤が正解とわかる。

**問4** これも読解の問題。第一段落と第二段落の話が正確に読めればやさしい。絵画において大事なものは、描く対象そのものをよく見ることだ、と言っているので、選択肢の下半分だけを見ても、④以外に正解はない。

**問5** テーマに関する読解の問題。今の学者は「聖人の経を求むと曰ふと雖も、固より已に其の真に非ず」と言っているので、「聖人の経」も「真」そのものではないということになる。画家の例を思い浮かべれば、「聖人の経」は「画本」にあたるものだとわかる。つまり「真を真似た」ものであつて「真ではない」のである。また、「訓詁を求むるは、之に似たるに似るを求むる者なり」と言っているので、「経」の注釈である「訓詁」は、さらに「真からは遠い」ものである。そう考えれば「経」は「真の似」であり、「訓詁」は「似の似」であるとわかり、正解は②と確定する。

**問6** いつもの内容合致の問題ではなく、文章構成を問う問題。かつて五年ほど前にも出たことがある。解き方は内容合致と基本的に変わず、消去法で絞り込んでゆくのがよいだろう。あきらかにおかしいものを消してゆくと②と⑤が残る。②は後半は正しいが、よく見ると鄭法士と陳閔を「聖人」の比喩としている。第三段落の最初を見ればわかるとおり、聖人に喩えられているのは、楊契丹と韓幹である。よつて、⑤が正解。

### 【書き下し文】

隋の田・楊、鄭法士と俱に画を能くするを以て名あり。法士自ら芸の楊に如かざるを知るなり。乃ち楊に従ひて画本を求むるに、楊之に告げず。一日法士を引きて朝堂に至り、指すに宮闕・衣冠・人馬・車乗を以てして、曰く「此れ吾が画本なり。子之を知るか」と。是に由りて法士悟りて芸進めり。唐の韓幹馬を貌るを以て召され、入りて供奉たり。明皇詔して陳閔に従ひて画法を受けしめんとす。幹困りて奏すらく「臣に自ら師有り。陛下の内厩の飛黄・照夜・五方之乗、皆臣の師なり」と。帝之を然りとす。其の後幹の画遂に果たして闕を踰ゆ。

楊・韓の二子のごときは、能く其の真を求むる者と謂ふべきなり。彼の似を以て似を求むる者は、則ち益遠し。今の学者、聖人の経を求むと曰ふと

雖も、固より已に其の真に非ず。乃ち経を捨てて専ら訓詁を求むるは、則ち其の之に似たるに似るを求むる者なり。尤も遠からずや。

### 【現代語訳】

隋の田僧亮と楊契丹は、鄭法士とともに絵画の才能で有名であった。鄭法士は自分の腕が楊に及ばないことを知っていた。そこで楊について絵の手本を教えてくれるよう求めたが、楊は教えなかった。ある日、楊は法士を引き連れて朝廷に行くと、宮殿の建物、官吏の衣服や冠、人馬や乗り物を指さして、「これが私の絵の手本だ。あなたはそれがわかっているのか」と言った。これによつて法士は悟つて、絵の腕が進歩したのだった。

唐の韓幹は馬の絵を描く才能で朝廷に召され、宮廷に入つて供奉となつた。皇帝は韓幹に詔して、陳閔について画法を学ばせようとした。韓幹はそこで「私には自然に師がおります。陛下の厩舎にいる飛黄や照夜、その他各地から集められた駿馬たち、すべてが私の師でございます」と申し上げた。帝はそれを聞いてなるほどと思つた。その後、韓幹の絵画の腕は、結局陳閔を超えたのだった。

楊契丹・韓幹の二人のような人物は、「真理を求め」ることが出来る者と、言つてもよい。（真理ではなく）似たものによつて似たものを求める者は、ますます真理から遠ざかつてしまう。今の学者は、「聖人の著した經典に書かれていることを追求している」と言っているけれども、（經典に書かれていることは）もともとすでに真理そのものではないのだ。それなのに、その經典さえ捨てて、經典の字句の注釈ばかり読んで研究しているのは、真理に似たものに似ているものを研究しているのである。なんと真理から遠いことだろうか。

（文責・漢文担当 門屋）